

野中光正展



131107 2013年 木版画、紙 50.0×38.0cm

2014年2月20日(木)―3月23日(日)

9時―21時(月曜日休館)

会場／砂丘館ギャラリー(蔵)+1階全室

※1階和室会場は市民利用等で

見学できない場合があります。

主催／砂丘館／観覧無料

野中光正(のなか みつまさ)
1949年東京都鳥越生まれ。73年木版画・絵画をはじめ。68～71年太平洋美術研究所、73～82年渋谷洋画人体研究所で描く。77年横浜国際船客ターミナルでの初個展。89年新潟県高柳町に移住、紙漉を学ぶ。91年かやぶきの家(高柳)で個展、同年10月末に東京に戻る。以後は、ゆーじん画廊、ウィリアムモリスギャラリー、ギャラリーアピアント、高志の生紙工房ギャラリー(高柳)、アートショップ杜の未来舎ぎやらりい(仙台)などで個展。新潟市では新潟絵屋で01年3月、05年3月(画廊 Full Moonと2会場で)、06年11月、10年3月、12年3月に個展を開催。

同時期開催「野中光正展」

2014年2月28日(金)～3月10日(月)
11時～18時(最終日17時まで)

会場:新潟絵屋
新潟市中央区上大川前通10番町1864
Tel.Fax.025-222-6888 info@niigata-eya.jp



020308 2002年 油彩・水彩、綿布 90.0×59.7cm

東京絵

大倉 宏

東京浅草にある野中光正の仕事場で絵を見ていたら「かけ」という言葉が浮かんだ。

やりかけ、書きかけ、作りかけ…の「かけ」。

野中が生まれ、今も暮らす浅草は、東京の下町。銀座や渋谷などの繁華な街を表とすれば裏的な地区という感じで、今も歩いていると紙とかプラスチックとか仏壇とか徽章とか、あれこれの問屋、小さい工場などが目に入る。生家もかつては鉄工場をしていた。20歳の野中はそこで働きながら、運河の巡る下町の風景を毎日描いた。工場の音と油と水の匂いのするそれらの素描が、やがて簡略化され、イメージが消えていくのだが、この変化を「かけ」と考えてはどうか。

東京下町も今はビル街で、野中の家も50年前に3階建てのビルになった。下町も変貌させた西欧文化の配電盤東京は、無数の新情報を発信し続け、自ら全体をも劇的に変貌させてきた怪物都市だった。長期計画を綿密に完成していくプロセスではない変貌は「かけ」のかけらをまき散らす。中途半端でありつつ、きらきら輝く無数の「かけ」かけら。

野中のビルの2階は昔ながらの作りの和室。その上階のアトリエでコタツに入り、LPレコードを聞きながら昼寝をした。バツハが終わると、どこから工場の音がかすかに聞える。野中が散歩するという隅田川、浅草寺界限、谷中、上野公園、美術館。平面に広がる都市に過去現代の無数の異なる時間矢が垂直に、斜めにつきささっている。かけは「欠け」でもあって、そうした欠けたものが、無数につき合わされた場所の暮らし。顔料を自分で擦り、新潟の手透き和紙に刷る野中の抽象木版画は、完璧を求める職人仕事の一面を持ちながら、近年はラフに筆を加えたり、雑巾で乱したり、積極的に緻密を欠けさせようとする。まるで完成手前の「かけ」状態に置かれる画面に東京を感じる。(砂丘館館長／美術評論家)

